

明日は我が身



「あんなバカは死んだほうが」

「坂田彰義さん（仮名）の所在が不明になつています。ご存知でしょうか」

大阪市西区の区役所職員から電話がかかってきた時、親族の一人はその「老

れ、生きていれば現在103歳になつていて。しかし、妹の所に顔を出したのを最後に、「80年頃から親族は誰一人その居所を知らない。30年にわたつて、「所在不明」と明るみに出た8月上旬のことだ。

屋を営んでいて、自身も大工として生計を立てていた。腕が良かつたのだろう、物資や食料が不足していた戦後まもない頃、缶詰、砂糖などを実家によく持ち帰っていた姿を親族の一人はいまでも覚えている。'46年頃には妹夫婦の紹介で連れ

子のいる女性と結婚し、男子を一人授かりもした。坂田氏の人生が暗転し始めた契機は、喫茶店経営の失敗だった。妹夫婦の住む新潟県内で始めたが、半年も経たないうちに店は閉店。それでもあきらめきれず、「新潟市内の繁華街に

坂田氏は1907年生ま

長男。長野県の生家は建具

所在不明高齢者20万人超

捨てられた老人たち その孤独な死に様

血縁も地縁も
当てにならない

文中にある78歳一人暮らしの老女
が発見された部屋
撮影：イッセイハツトリ



場所を移せばうまくいく」と説いて、長女夫婦から700万円ほど借りた後、そのままカネを持って豪を消した。「5年頃のこと、女房には『一族あけてくる』とのみ伝えていたそうです」と前出の親族は振り返る。とはいって、坂田氏はその後もしばらくは兄弟親族のもとに顔を出していた。いずれもカネの無心で「いまは大阪にいる。世話になつた人にカネを返したい」などと言つてきたといふ。兄弟姉妹たちはその度に怒つて叱りつけたが、何よりも生きていることを確認でき

た嬉しさからカネを渡していくだ。しかしそんな豪も、五女のものと訪れた80年を最後に、見られなくなつた。別の親族が言う。

「親族の間で探したほうがいい」という声も出たのですが、「私たちにどれだけ迷惑をかけたのか」「あんなバカは、のなれ死んだほうがいい」という意見に最後は誰

何十年も連絡を取らない居場所を知らない、死んだかどうかさえわからぬ。東京都足立区の111歳の男性が自宅でミイラ化していた事件を契機に、日本全国に広がりを見せていく「消えた100歳」問題。高齢者を巡る家族関係の一端を浮き彫りにした。

東京都の港区社会福祉協議会が行つた一人暮らし高齢者（65歳以上）の生活実態調査（平成18年）を見るところ、そんな老人達の「孤立」がよくわかる。

たとえば、「緊急時に誰か来てくれる人がいるか」との問に「いない」と回答

も反対しなくなつた。それからは「存在しない人」として誰も「生死を確かめよう」なんて口にしなくなりました。

区役所の職員によると住民票の場所にはビルが建つていて、免許証なども失効していたそうです。生きているかどうか？　もちろん知りません」

の状況」という質問に、「つきあいがない」「あいさつをつかわす程度」との回答が4割以上に及んでいた。

長野市では現在、県内最高齢とされている110歳の男性が所在不明となつておる。息子と同居していたとされる家は国道沿いに建つ。地域の民生委員に聞くと、男性がずっと昔にその場所に住んでいて、牛を飼っていたことを記憶している。ただその後は、姿を一度も見ていないという。

近所の住民たちも「所在不明になつている老人につきあいはなかつたようだ。民生委員が3年ほど前にその家を訪ねたときには、息子から父親の所在について「2年前に一度探そうとしたが、病気になってしまった」と聞かされたといふ。心配しているという風ではなく、男性はまだ生きているという話は振りで、「伊豆のはうにいる」とも言つていた。親子で連絡くらはは取つてゐるのだろう。民生委員は

それが違つているとわかつた。父親と最後に話したのはいつかと聞くと、「家を出てから話をしていない」と言ふ。電話もしていないのかと尋ねると、「連絡もしていない」と答えた。

聞けば、男性が家を出るときに喧嘩をしたといふ。だから自分からは連絡をしないかったこと。本誌記者が息子を訪ねると、「何も答えない」との声がインターホン越しに返ってきた。

100歳以上の所在不明高齢者は、確認されているだけでも全国で280人を超える（8月17日現在）。昨年発表された厚生労働省のデータによると、日本における100歳以上の高齢者は4万399人。約0.7%、つまり100人に7人が行方不明ということだ。

これを約2900万人いる65歳以上の高齢者に当てはめて考えてみると、20万人以上もの所在不明高齢者がいるという計算になる。まんざら非現実的な数字で

はないだろう。

血縁、地縁はいまや当然にならない。そして、人生最後の瞬間を一人で迎える高齢者は多い。

故人宅の遺品整理や清掃をおこなつ会社『キーパーズ』（愛知県刈谷市）の吉田太一社長は、日本全国でそんな孤独死の現場に立ち会つてきた。

都内のマンションの一室。一人暮らしだった78歳の老女は、畳の上で誰に看取られる事もなく死んでいた。死後数日経つていて、警察官が遺体を運び出すと、畠には老女の体の痕が残っていた（右頁写真）。

第一発見者は週に一度ほど訪問していたホーリヘルババ。老女の男兄弟はみな亡くなり、4姉妹とは不仲

が続いていた。姉妹の一人はそのマンションから数kmほどのところに住んでいたが、交流は一切なかつた。現場に立ち会つた甥にして、小学生の頃に顔を見たのが最後で、50年以上も会つていなかつたといふ。

部屋にはインスタントラーメン、缶詰、ふりかけといった食料が少量あるばかり。生活必需品以外にはテレビ雑誌があるだけで、唯一の娛樂はテレビ观赏だったことがうかがえた。

壁に張られたカレンダー！ 日付の下に小さな○がつけてあつた。一日の終わりに、今日も生き延びた証を残していたのかもしれない。ただ亡くなつたのは月末だったが、最後の○は17日でとまつていた。

遺族が遺骨を引き取らない

「最近は、『同居内孤立死』も多くなつた」

と吉田氏は言う。聞きなれない言葉だが、一世帯住宅や同じマンションに住んでいる親子なのに交流がなく、死んで何日間も経つた

後に初めて気付く場合を指すという。

死後1ヵ月間も気付かれず、放置されていたケースでは、亡くなつた父親と同じマンションに息子が住んでいた。父が2階、息子が

4階。近くにいるという安心感からか、コミュニケーションはとつていなかつた。何かあれば言つてくるとの甘い見通しもあつたのだろうか。

父親が亡くなつて、布団にはウジ虫が湧き、掛け布団の一部は人形のように変色していた。吉田氏がそんな現場に赴くと、息子は手伝いもせず階上の自室にこもつていた。死亡現場はゴミ屋敷のようにモノが散乱していたが、息子には父親の死を早くみつけてやれなかつた後悔などまったく感じられない。息子は終始明るい様子で、「これじやあ、この辺に住めなくなるなあ」と語つた。

吉田氏が言う。

同居内孤立死のケースは、子が親にバラサイトしている家庭に多く見られます。怒鳴られるので子供の部屋のドアを勝手に開けられない親もいて、子のほうが孤立死していることもあります。子供といつても高齢化しているケースが多く、これからは同じマンション内で親子そろつて孤立死して

いるなんてことも起つります。どうか

日本全国で引き取り手のいない遺体は、毎年3万2000件ほどあるといわれている。葬儀社富士の華（東京都千代田区）は、そんな亡骸も引き受け葬儀を行つてゐる。同社代表の野田穂積氏によれば、まったく身元のわからない人も少くからずいるが、ほとんどは遺族が引き取りを拒否しているといふ。

「そういう方は、故人の死に立ち会わない、金銭面での負担をしたくない、遺骨も引き取りたくない」とおっしゃいます。経済的理由でという方もいますが、ほとんどは故人と遺族との間に大きな溝が開いてしまつてゐるケースです。

死亡届の提出も我々が代

がわからぬ行旅死人の中に、「消えた100歳」が含まれている可能性もある。いずれにせよ、そうした故人は家族の見送りもなく、スタッフによって火葬されていく。

ただ、親族にさんざん迷惑をかけた故人であるにもかかわらず、最後の見送りにだけは来たという家族もある。ある遺族は「本当にあなたには迷惑をかけられたのよ。生まれ変わつたら、ちゃんととした人生を送るのよ」と故人に声をかけていたという。野田氏は「どんな言葉をかけられようと、亡くなつた方は最後を見送られるだけで、少しでも救われるんじゃないでしょうか」と語つた。

冒頭で紹介した坂田氏の親族の一人はいま、後悔しているという。

「彼は家族にさんざん不義理をしてきた男でした。ただ今となつては、もつと必死に探しでなければよかつたとも思つています。家族を笑き放した我々も、世間から見れば恥ずかしい存在なのですから……」